

大賞となった『うどんの神さま』は、老舗のうどん屋を舞台に家族の再生を描き好感が持てた。4年生の陽翔^{はると}の語りにはふざけた表現も目立つが、シリアスなテーマをユーモラスに明るく描いており、一番おもしろかった。タイトルにもなっている「うどんの神さま」の印象が薄かったのが残念だった。

優秀賞の『おとぎ電車と宵待の橋』は、5年生の賢一と弟がおとぎ電車に乗ってダム湖に沈んだ集落へ迷い込む魅力的な設定だったが、そこで子供だった担任の教師や父親に出会ったあたりから解せない点が出てきた。集落の地図が欲しいと思いながら読んだ。

『風神さまのお留守番』は自分の名前にコンプレックスのある4年生の美叶が、町に伝わる風神の言い伝えと発電用の風車にかかわる都市伝説を体験する。4年生の美叶の語りには文章が難しく、ストーリーも難解だった。この作品に限らず、難しい言葉や漢字を使う人がとても多いが、読者の年齢層も考える配慮が欲しいといつも思う。

『フライアウェイー白銀の翼ー』は、養蚕農家を嫌い都会に憧れる6年生の結が、あるきっかけで三眠蚕^{さんみんさん}という突然変異の蚕が作る糸を復活させようと奮起し、養蚕を継ぐ決心をするまでを描いている。養蚕、特に三眠蚕という極細の生糸を取れる蚕について詳しく、非常に興味深く読んだ。タイトルは再考を。スキーか何かの話題だと思った。

短編の『床屋にきたライオン』は、年老いて店じまいする床屋にやってきた、やはり年老いたサーカスのライオンとのやりとり。古風な印象の物語で斬新さはないが、どの場面も絵が浮かんでくる。絵をつけたらいい絵本になると思った。

年々応募数も増え、文章もうまくなっていると感じる。多くの書き手のエネルギーをひしひしと感じた。賞を取った人も、逃した人も、ここからさらに一歩先へ。書き手の皆さん、がんばれ！ 応援しています。

「フライアウェイ 白銀の翼」 「おとぎ電車と宵待の橋」
「床屋にきたライオン」の三作を推す

小川 英晴

今回、私は『フライアウェイ 白銀の翼』『おとぎ電車と宵待の橋』『床屋にきたライオン』を意中の作品として選考に臨んだ。その他、『ゴンスケ』『どんどん出る!』にも注目したが、何よりも大作の二作品は、物語の魅力と文学的感銘の深さにおいてほかの作品を圧倒していた。

『フライアウェイ 白銀の翼』これは明治時代から続く養蚕農家の娘・結^{ゆい}へと続く物語だ。かつてひいばあちゃんのつくった生糸はエリザベス二世の戴冠式でドレスの刺繍として使われていた。蚕が口から糸を吐いて繭をつくるためには、四回脱皮し五つの成長過程を経なければならない。この物語を読み進んでいくほどに、まさにその成長の渦中にいるような錯覚にさえさせられた。また、『おとぎ電車と宵待の橋』では、ダムの下に没してしまった町と当時あったおとぎ電車への調査へ向かう賢一がその途上で弟のマモルと突然当時の町に迷い込み、そこで若い日のノリッペ先生や若き日の父に出会うという話だ。そこで二人は奇跡的体験をし、いまここに、かつてあった世界と一つに重なり合う。物語は心温まる文体によって展開していく。

もう一点、『床屋にきたライオン』では、歳を取り、もう前のように持てる力を十分に発揮できなくなった床屋の老主人と、かつてサーカスの花形であったライオンとのしみじみとした心の交流が描かれている。読み進むほどに、心の変化が美しい陰影となって読者の心に迫ってくる。この作品をぜひとも絵本にしてほしいと願っているのは、私ひとりだけではないだろう。

最後に、大賞を見事に受賞した『うどんの神さま』は、読みやすく、かつ知らず知らずのうちに読者の心を魅了していく力を持った作品。私もひかれたが、父親像の設定に少なからず疑問を持った。家を出てからの経験が語られず、父親像にリアリティが感じられなかったからだ。しかし、よくできた作品であることは間違いない。大賞受賞に異論はない。

子どもたちが小説を読み、自分の知らない世界を体感することで成長するように、小説中の子どもも自分の身のまわりで起こる出来事を見聞きし語ることで成長します。大賞を得た『うどんの神さま』は〈父帰る〉のお父さんが主人公のように見えますが、父の子どもである「ぼく」や「ぼく」の兄の物語と言ってよいでしょう。生き生きとした語り口調、ユーモアとウィットに富んだこのお話は、文学の面白さを今の子どもたちに味わわせてくれます。うどんの匂いや味が失われかけたおばあさんの記憶を取りもどすように、兄弟から失われた「お父さん」という言葉を取りもどすことがこのお話の文学的なテーマです。認知より大切なもの——体や五感の感覚——があるということの明示が私たちを勇気づけてくれます。剣道の裂帛^{れっぱく}のかけ声や梅子おばさんの饒舌^{じょうぜつ}など、かつての地域社会や家族には、言葉が真剣に、かつ円滑に使われていました。小説家になることができなかったお父さんが肥満しているのは、言葉が体の外に出なくなったことを暗示しています。家族の再生、地域社会の再生のヒントがこのお話の中にあるといえるでしょう。

優秀賞を得たのは『おとぎ電車と宵待の橋』です。これはとびきり新しいお話ではありませんが、物語の豊かなあじわいを感じさせてくれるものでした。細部の整合性にいささか違和感はありましたが、物語の構想と明るい読後感が評価されます。

『フライアウェイー白銀の翼ー』も面白く読みましたが、地域から世界へといったテーマがやや性急に展開されたのがもったいないなかつたです。

短編では『どんどん出る！』に巧さを感じました。『風神さまのお留守番』『ゴンスケ』『床屋にきたライオン』は評価が分かれ、高い評価を与える選考委員もいました。『満月に吠えろ』『こんどあえたら』にはドラマのような面白さも感じました。

第34回小川未明文学賞の大賞は『うどんの神さま』に決まりました。テーマは古いと思いましたが、書きなれた文章で、家族やまわりの人たちも魅力的でした。子ども目線とすると離れており、大人目線では物足りなさがある。でも大きな破綻もなく、家族再生の物語として読ませる力がありました。子どもの本とするなら、次男の視点で書き直したほうがいいと思います。

『おとぎ電車と宵待の橋』が優秀賞です。昭和の時代にタイムスリップするお話でした。担任の先生や自分たちの父親の若い頃に出会います。せつかく出会うのだから、そこから今まで何か謎だったことが解決するとかにできたらよかったです。大人は読めば懐かしいでしょうが、今の子どもにとって昭和の電車や風景を懐かしくおもしろがるか？が気になりました。あと弟が昔の電車に乗れた理屈を書かなければいけないと思います。

私は『ゴンスケ』と『風神さまのお留守番』の二作もおもしろかったと思いました。『ゴンスケ』はロボットが感情を持ってしまうという昔ながらのテーマでしたが、なんでもAIに頼っていくことになる今、正しいことを教えてくれながらゴンスケのように個性のあるAIがあれば楽しいし、AIに頼ることも怖くないのかもと思えました。ゴンスケが町内会の人たちにも好かれていく様子にほのぼのしました。『風神さまのお留守番』は土地の伝承をうまく絡めて、そこにまきこまれていく主人公たちのお話でした。構成はしっかりしていたと思います。風力発電の描写、名前のコンプレックス、少し長すぎたように思えましたが、謎の回収は見事でした。短編は『どんどん出る！』の視点がユニークでしたが、もう少し鉛筆の不思議さがわかりやすかったらいいと残念です。

今回最終に残った9編は、それぞれ読み応えがあって、作者に感謝したい。

9編のうち1編でも短編をと願ったが、長編にくらべて、少し物足りなさが残ったのが、残念だった。短編の中では、『床屋にきたライオン』を幼年童話として楽しく拝読したが、床屋さんがライオンの出るサーカスを見に行くのに、時間がないからかタクシーで行くのに、では床屋にきたライオンはどうやって来たのか書いてないのが、もったいなかった。人に出会えば大さわぎになるだろうし、その姿がここで書いていれば、もっと良かった。

『うどんの神さま』はテンポもよく、最初からドラマを感じさせて、楽しく拝読することができた。兄弟の、家出をして戻ってきた父に対する気持ちも、母の父に対する気持ちも、まっすぐに入ってきて、上手だなと思った。ただ、「うどんの神さま」の神様の存在が、作品の中でふれてもらえるともっと良かったと思った。退学が休学へというひっくり返しもうまいなと思った。とにかくうどんのようにツルツルと私の中に入ってきて、いい作品だなと感心した。

『おとぎ電車と宵待の橋』は、ダムに沈んだ村とその後の姿と、ノリッペ先生と少年たちの姿が目に見えて、楽しく読み進むことができた。おとぎ電車、宵待橋など読み手を先に先にと進んでいく上手さと、迷子になった弟など、書き慣れている方だと思いながら、私の中では一番楽しく読めた。

『フライアウェイー白銀の翼ー』は、養蚕を通して、主人公・結が成長するのが魅力的だった。初めて知ることが多く、きっと作者が興味を持って調べたことが、この作品を生み出したのだと思いながら、ひとつ勉強させてもらった楽しさが読後に残った。こういう作品が生まれるお陰で、児童文学の世界が広がると思うとうれしい作品だった。

小川未明は、リアリズム以上のリアリティでメルヘンを書いた作家だと私は思っているので、その出現を望みたい。

今回の最終選考は、長編 6 編、短編 3 編、いずれも表現力が高く力作揃いでした。

大賞『うどんの神さま』は、家族の再生が明るく爽やかに描かれた作品。大人の問題が中心となり、主人公の葛藤や成長が希薄なのが惜しまれますが、物語全体の完成度は高く、うどんの描写も秀逸でした。優秀賞『おとぎ電車と宵待の橋』は、表現が美しく、幻想的な映像が目に浮かぶようでした。各登場人物の人柄や思いが描かれていると尚よかったです感じます。『こんどあえたら』は、主人公とクラスメートの友情が丁寧に描かれていました。ただ普遍的なテーマゆえに、今の時代をとらえる新しさがほしかったところです。『どんどん出る！』は、やや既視感のある内容であり、独自性、説得力が望まれます。構成が巧みでテンポよく進められました。『床屋にきたライオン』は優しい気持ちになれるファンタジー。一方で、抜きんでた個性や現代の子どもたち向けの設定が欲しいと感じます。『満月に吠えると』は起伏に富んだ展開が魅力的ですが、構成のバランスやつながりにもう一度工夫があると良かったように思います。『ゴンスケ』は、現代の AI が身近な状況を鑑みた設定であれば、子どもが共感しやすい今日的な物語になったのではないのでしょうか。全体のまとまりがよく、散りばめられたユーモアが魅力的でした。『風神さまのお留守番』は、名前へのコンプレックスを抱える主人公の心情をリアルに描き出していました。ファンタジーとリアルな要素が、より溶け合っていると完成度が増したように思います。『フライアウェイー白銀の翼ー』は、養蚕というテーマが興味深く表現レベルも高い作品でしたが、各人物の感情の描き方の点で惜しまれます。

賞を逃した作品も、書き手の方々の思い、熱意や個性を感じました。深く敬意を表するとともに、今の、そしてこれからの子どもたちが感情をのせて読むことができる作品との出会いを引き続き楽しみにしております。